

真里谷信勝が上総侵攻の手を緩めたのは、この年の暮れのことである。隠居中の父・信興の容態が悪化したためだ。信興は房総武田氏の始祖・右馬助信長の孫であり、真里谷家を興した人物である。それゆえに人一倍苦労してきた。信勝も父に対し畏敬の念で仰いでいた。

「原の連中には格別の温情である。我らがじつとしていることを有難く思え」

そう豪語するものの、真実は、原氏との敗けが重なることから立て直す猶予に過ぎない。

建前に隠された本音、信興はその弱気を病床で詰った。

「当主はそなたぞ。老いぼれた者に気なんぞ配ることなかれ。儂はもう死んだものと思うがよい」

「父上」

「聞けば里見の家では、倅が〈一統〉などと大言壮語しているそうじゃな。いつそのこと矛先を安房に転じたら」

それは一理あるが。

「それは出来ませぬ。背後を原式部少輔に突かれる恐れがございます。また、その主家である千葉介も、我らの台頭を認めておりませぬ。むしろ里見と組まなければ、戦線を維持できない状況でございます」

「まことに惜しいものよな。里見の領土を併呑すれば、我らの基盤は倍にもなるうて」

情勢がそれを許さなかった。

「まずは原を討つ。原さえ倒せば、千葉介は自ずと屈することができます」

信勝の言葉にじつと考えていた信興は

「乱波を用いるがよい」

「流言飛語で、敵を掻き乱すと？」

「見戯にも等しい策ではある。が、存外、見戯と呼べるような策に溺れるものよ」

「千葉介と原を切り離す、ということぞ？」

信興はニヤリと笑った。

真里谷信興は、繰り返し、里見を討つ絶好の好機であると呟いた。それを知りながら動けぬ

信勝は、ただただ繰り返し言を聞くしかなかった。

真里谷信興は、一己の中原の雄として、翌永正八年に没した。

原式部少輔胤隆が隠居し、猶子・淡路守朝胤に家督を譲ったのは、連歌師・柴軒屋宗長が訪れたのちのことである。

隠居ののち〈全岳院善覚〉と号したのちも、実権はその手に掌握した。

家督を継いだ朝胤は、扇谷上杉治部少輔朝良の諱を頂戴し、足利高基との連携に努めようとしていた。

この朝胤が体調不良に陥り床に伏すようになったのは、永正八年（一五一一）の春のことである。当初は食あたりと囁かれていたが、いつの頃からか

「毒を盛られた」

という風聞が広がりました。

「そのような不謹慎な戯れ言、申すことなかれ」と家中に触れていた善覚も、そのうち

「毒は主家によるものなり。主家を凌ぐ原氏衰退を企てた謀なり」

という声が広がるにつれ、さすがに無視することも出来なくなった。

佐倉城へ自ら赴き

「何か当家へ含むことはなきや」

と詰問するに至ったものの

「善覚入道こそ、当家への企みはなきや」

千葉介勝胤は威圧的に凄んだ。

千葉家中にはこのところ不穏な失火が多く

「主家より国を奪わんと欲する原入道が仕業に相違なきや」

という流言飛語が囁かれていたのだ。

もちろん、千葉・原ともに、その心当たりはない。

「されば真里谷が放つ乱波の、小賢しき仕業かな」

と、双方凝りを残したまま手打ちとなったのだが、善覚の胸中は、一度芽生えた不信任感を拭うことが出来なかったのである。

「ゆくゆくは千葉家を取って代わる」と叫び、これよりのち、原一族は千葉氏への警戒を強めた。

もちろん、表立っては双方とも協力関係にある。さもありながら、互いに腹に逸物含む接し方であった。

真里谷信勝の策は、静かに効いていた。  
十  
十  
十

## 上総大乱(2)

夢酔 藤山